

論文の内容の要旨

論文題目 植民地プロレタリア青年の文芸再生

氏名 張文薫

台湾の歴史には、1895年から1945年までの50年間にわたった「日本統治期」がある。日本植民地統治下に置かれながらも台湾は様々な面で前近代的遺風を脱却し、近代化の道を実に歩んでいった。その流れの中で登場し、台湾社会の封建性打破を目指した新知識人は、近代的教育によって身に付けた思考と行動様式を具現化し、従来文芸界の中心であった漢詩とは性質の異なる「台湾新文学」を中国白話文運動の影響、また台湾話文運動の提唱を経て創成させた。1933年に登場した張文環(1909～1978)もその一人であった。1933年から終戦までの10数年間で、張文環は一介の日本留学青年から文壇の主力作家へと成長し、台湾文芸界に大きな足跡を残した。張文環は1933年東京で他の留日台湾知識人とともに「台湾芸術研究会」を組織し、台湾最初の日本語文芸雑誌『フォルモサ』を創刊、1935年には『中央公論』の小説懸賞に入選、帰台後の1941年からは雑誌『台湾文学』を発行する一方、精力的な創作活動を続け、戦時下の台湾文壇に絶大な影響力を發揮したのである。台湾文学史を語る上で絶対に欠くことのできない張文環だが、その作品は長い間もっぱら「風俗小説」との評価を受けてきた。「台湾の伝統風俗」の描写による日本植民支配に対して抗議することが、張文環文学の特徴とみなされているのである。「風俗小説」という風に評されるのは戦前の同時代作家と評論に由来するが、その内実が十分に検討されないまま、現在でも通説化している。

もともと「風俗小説」とは、日本文壇において『人民文庫』派の作家を評する時によく使われた言葉である。日本プロレタリア文化運動は外的な弾圧及び内的な政治主義傾向のために崩壊する直前から、後に『人民文庫』の主宰者となった武田麟太郎は「プロレタリア作家同盟」(ナルプ)指導部の政治至上主義的な指導方針に不満と疑問を抱き、規定された文学における「政治の優位性」とは異なる文学活動を志向し、文学創作における自らの道を開拓している。その作品はプロレタリア文学再生の一つの方向として肯定される一方、「思想性」が極度に排除されたためか、「批判性」を喪失し、代わりに「風俗への愛の強調」を前面に打ち出した「風俗小説」であるとして批判されたのである。

このような「風俗小説」作家として評された張文環だが、実はその背後には植民地知識青年と日本プロレタリア文化運動との密接な関連性が隠れていた。本稿は、張文環が「風

俗小説」作家と評されるにいたるまでの日本のプロレタリア文学運動との関わりを明らかにし、それによって常に民族解放問題に直面せざるをえない植民地作家が宗主国経由での前衛思潮受容を通して、いかに自らの文学を成立させたか、そして結果的に宗主国と異なる文化をいかに創造発展させていったかを浮き彫りにしようとする試みである。そして、張文環が代表した日本語世代の台湾人作家の多くが、日本でその文学活動の道を歩み始め、「日本語」を知識吸収かつ創作する工具としている。植民宗主国の言語を操ることは、日本語世代の作家たちに前の世代と異なる文芸価値観を持ち合わせる結果をもたらして、台湾新文学の性格を大きく影響している。そのために、張文環の履歴を文学活動と作品を軸に分析することで、台湾新文学における「文芸」観の変化、及びその過程に照らされた民族と近代の葛藤について検討することも、本稿の目標となる。

まずは、張文環文学の出発点である「台湾芸術研究会」及びその機関誌『フォルモサ』の成立について、同時代の日本プロレタリア文化運動とまだ発展途上にあった台湾新文学運動という二つの運動の流れの中で捉え、その性格を把握する。在東京台湾人団体である「台湾芸術研究会」は日本プロレタリア文化運動と繋がりを持ちながら、一方で民族社会運動をも指導するという台湾エリート団体特有の性格を備えていた。「台湾芸術研究会」の前身である「東京台湾文化サークル」とは、1929年の「四・一六」後に壊滅状態に陥った民族社会運動の指導組織「台湾青年会」の残党と、プロレタリア文芸に志す新世代の留日台湾青年との結晶であった。「台湾青年会」の血統を継承したことは、「東京台湾文化サークル」ならびに「台湾芸術研究会」の性格に大きく影響している。『フォルモサ』の内容には、島内の文芸状況を無視し、「吾々」の手で台湾に文芸を創造するという自負が見られるが、それは「台湾青年会」の系譜に位置する社会運動の指導者との自認に由来するのでといえよう。しかし同時期の台湾島内は、必ずしもこれら青年が描くような、文化文芸の芽生えすらない場所ではない。1920年代後期、「民族」とともに「文芸」は新知識人の視野に入ってきた。1930年代になると、文化啓蒙のための手段、それでも世界プロレタリア文学と繋がる利器なのか、「文芸」の「効用」と定義をめぐって、文芸界関係者の意見に分歧が生じ、「文芸大衆化」問題及び「郷土文学論争」という二つ大きな議題を引き起こした。実際ともに社会主義の影響を受けた異なる観点を持つ論者たちは、議論が交わされているものの、「文芸」創作面における成果は貧弱である。そして「大衆」に対する認識も一致できないために、議論は常に異なる次元で交わされ合意を得ないままにいた。このような島内文芸界に、島内から一定の距離を置く東京に位置しながら、台湾民族社会運動と日本プロレタリア文化運動という二重の権威を持つ「台湾芸術研究会」の『フォルモサ』が勢いよく登場した。プロレタリア運動を越えた「文芸」の多様な可能性など、『フォルモサ』は日本文壇との同時性により台湾新文学関係者に対して前衛性の保証を提供する。さらに「国語」=日本語を介して、日本ないし世界文壇と接点を持ち、日本語で直接創作する能力を具えていたことは、用語論に多くの精力を費やしながらか、成果をあげるこのできなかった島内文芸界に大きな刺激を与えたであろう。1937年の新聞漢文欄廃止

という時勢も相まって、台湾人の日本語文学は『フオルモサ』を通じて台湾文壇の主導権を握るようになっていく。

張文環は、呉坤煌とともに「東京台湾文化サークル」時期以来『フオルモサ』の主力メンバーであり、「日本プロレタリア文化連盟」（「コップ」）の指導下に活動した歴を持ち、日本プロレタリア文化運動から大きな影響を受けた。『フオルモサ』停刊後張文環が発表した小説「父の要求」（1935）には、主人公が東京において左翼運動参加を理由に逮捕、釈放される過程に対する詳細な描写がみられ、「父の要求」を「転向文学」として認識する可能性を生み出している。その両者を対比し異同を明らかにすることにより、植民地知識青年がプロレタリア運動に従事する際に直面する伝統との断絶問題が明らかになる。また「父の要求」は、植民地青年の近代文明への憧憬が明確に表現された作品でもある。第一章で提起した「民族社会運動に内包される文芸」への意識変化という視点をそのままに、さらに「恋愛」によって具現化した張文環の「近代」憧憬の様相を分析することで、近代文明／伝統文化の構図が張文環の中で形成されていく過程が浮き彫られる。そして近代文明への憧憬、挫折から伝統回帰への過程という張文環文学の主題は、「山茶花」・「地方生活」・「土の匂ひ」など立身出世を求める青年が主人公である諸作品を系統的に究明することにより、張文環は同世代の新知识人が直面する現代／伝統及び都会／故郷の矛盾に対する思考の成果をまとめた。

最後、戦前の論者に「風俗小説」として認識されてきた「芸娼の家」など諸作品を取り上げ、「思想性」とは程遠い所にあった張文環の執筆意図を明らかにする。なかでも「芸娼の家」は当時台湾の社会問題となっていた「媳婦仔」という旧習の改善と関係しており、その執筆目的が社会改革にあったことを明らかにすることにより、「風俗小説」という枠では収めきれぬ張文環文学の特徴を浮かび上がらせる。しかし一方、日本『人民文庫』派作家武田麟太郎、高見順、平林彪吾との交遊関係が証明される張文環であるが、「芸娼の家」を含め多くの作品に『人民文庫』派文学の特徴である「饒舌」な説話スタイルが見られる。張文環が兄のように慕っていた平林彪吾は、創作に悩んでいた張文環に「話したまま」に書けとの助言を与えたが、小説の進行途中での作者の登場と語りは、まさに読者に話しかけるまゝのような創作手法にみえる。そして平林彪吾と同様に『人民文庫』派の主力作家であった高見順の代表作「故旧忘れ得べき」はまさに、「筆者」がいたる所に登場し語り続ける「饒舌体」と称される作品である。プロレタリア文学崩壊後、自らの創作方針を模索していた張文環は、『フオルモサ』を拠点に「左翼くずれ」の高見順、平林彪吾から「説話体」スタイルの作風という影響を受けたのではないだろうか。

以上のように、「風俗小説」と見なされてきた張文環の小説の一部は再評価の可能性を秘めてはいるものの、一方これらの作品に「風俗小説」と批判されてしかるべき欠陥が明らかに存在することも確かに否定できない。しかしいずれにしても実際のところ、張文環文学に対する綿密な検討もないまま「風俗小説」という評価を現在もなお肯定的に使用しているのが、多くの台湾文学研究者の現状ではないだろうか。本稿は「風俗小説」を切り

口に、プロレタリア文化運動への関与をその文学的出発点とする植民地作家、張文環の活動を日本・台湾が交差する文脈に還元し、同時代における位置づけを試みるものであるが、それはまた台湾新文学史の諸問題を再考するための端緒ともなるであろう。